



巻頭言「実践の振り返りを考える」 -紀要第2号の
刊行によせて-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井, 雅英 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9474

「実践の振り返りを考える」

—紀要第2号の刊行によせて—

福井 雅英*

『教職大学院研究紀要』の第2号が刊行の運びになりました。うれしい限りです。特集は「修了研究としてのMOBの意義と特徴」です。これは本学教職大学院としての重要課題を正面から取り上げたものであり、MOB研究プロジェクト委員会が共同研究を積み上げた成果を中間報告の形でまとめた労作です。諸論考は教職大学院の修了研究のあり方を考えることを通して、そもそも教職大学院の使命とは何かと考え、教職大学院における研究の意味を問い直すことになっています。

〈振り返るということ〉

本学教職大学院創設以来の教育研究の歩みを考えても、現職院生の基本的な研究内容と方法は、自分の実践を「振り返る」というのがほとんどです。ストレート院生でも、これまでの被教育体験や、何となく身についた子ども観や教育観を振り返ることになります。ですから「振り返る」という言葉が教職大学院の研究と教育を貫くキーワードの一つであることは間違いありません。教師は日常の実践の中で数え切れない選択と判断を重ねています。どういう教材を選ぶか、どのような授業展開を構想するか、それらを構想する際には、授業や指導の対象となる子どもの顔が思い浮かぶでしょう。「あの子がこの前△△の質問をしていたな」とか、「いまのクラスの話題の中心は〇〇だから、こういう学習を組んでみようか」など、子どもを想定したある判断があります。授業の実際場面で子どもに発問したり指名する場面でも、子どもとの関わりや生徒指導で子どもに声を掛ける場面でも、何という言葉にするか、どんな語調やトーンで、どんな表情・雰囲気働きかけるか、などの判断があります。このようなとっさの対応を迫られる場面で無意識な対応と見える場合でも、教師は何らかの子ども理解を前提に判断して、自らの言動を選び取っているのです。学校における教師の日常はこうしたことの繰り返しです。

ですから、「振り返る」というのは、その指導内容や対応を生み出した自分の判断を対象化して吟味するということになります。それは、無意識的に行っていたように感じる自らの言動をも意識化することです。そうすると、問題は、「振り返る」というときの基軸になる視点とか立ち位置です。これがはっきりしないと、何のための振り返りかが曖昧になるわけです。その探求は自分の実践を語る概念を獲得することになるでしょう。真摯な振り返りは、「そもそも…どうなのか」などと、より原理的で大きな問いと結びついていくことになると思います。それは、現時点での自らの立脚点も相対化することになります。揺れや戸惑いはそうした場合に起きるわけです。私も中学教師の頃、校舎破壊や校内暴力事件の対応に追われながら深夜の家庭訪問を繰り返し、その道すがら、生徒指導とは何か、この子らは将来にわたってどう生きていくのか、学校はこの子らに何ができるのかなどと、答えのはっきりしない問いを繰り返していたものです。しかし、そのような応答を反芻することで、生徒に対して「キチンとする」ことを性急に求める直線的な対応のみの狭さからは抜け出せたと思います。こう考えると、実践上の「揺れや戸惑い」は新たな問いを生み出す概念の攪拌作用のようにも考えら

* 北海道教育大学教職大学院（大学院教育学研究科高度教職実践専攻）札幌

れるのです。

〈「教育実践」ということ〉

ところで、「振り返り」はどこまでも教育実践を対象とするのですが、今日では教育界の日常語であるこの「教育実践」という表現はどのように生み出されたのでしょうか。

「教育実践」という言葉が我が国で使われるようになったのは1930年代で、それまでは「教育の実際」などと言い習わしていたようです。このあたりの事情を研究した川口幸宏は、1930年代の土佐の教師上田庄三郎の言葉を紹介しています。上田は、それまで使われていた「教育の実際」などという言葉が迫力を失って、「実践という意志的な言葉」が愛用されるようになったのは時代への動きを表していると言っています。(川口幸宏『生活綴方研究』白石書店1980年、39ページ。引用は上田庄三郎『激動期の教育構図』啓文社1934年 上田著作集③303～304国土社)

上田の使う「意志的な言葉」という語句からは、追求する価値を踏まえた教師の主体的な実践の展開が意識されていたように感じられます。教師としての主体性を意識するとはどういうことでしょうか。実践者が自ら追求する教育的価値と方法を選び取る判断の主体である自覚を伴っているのだと思います。

〈教師の主体性〉

私が強い影響を受けた故稲垣忠彦先生は、「何のために、何を、どう教えるか」をつないで考えることを強調されました。その言葉に初めて接した時には、「当たり前のこと」だと受けとめ、稲垣先生がそれを取り立てて話される意味が十分理解できていなかったように思います。先生はまた「教師のオートノミー」ということも強調されました。二つを重ねて考え、自立した実践主体としての教師の自己形成に関わる重要な問題なのだとかやがて得心することになりました。教師の自律性、主体性を強調することが、個立や、まして孤立に傾斜すると問題です。それを避けるのに実践研究の交流の場が重要です。稲垣先生の提唱された「授業のカンファレンス研究」はその具体的な実践だったとも考えられます。その授業に参加し、座長としての先生のコーディネートぶりを目の当たりにしながら、その時には十分理解できていなかった私の認識力のお粗末さにはため息が出るのですが。

〈教職大学院の教育研究と教師の成長〉

専門職としての教師が、持続的に成長していくためには自分の実践の振り返りと実践・研究の交流が欠かせません。そして、院生みなさんが持つ問題関心や研究課題は、教職大学院の2年間でMOBを作成して完結するようなものは少ないでしょう。そのほとんどは、その人の教職生涯を通して、繰り返し課題として意識され、探求し続けることになるような性格のものであります。ですから、教職大学院で研究するのは教職生涯を通して学び続けるのに役立つようなものでなくてはなりません。こう考えて、教職大学院で獲得して欲しい力量を端的に言うとうどうなるか。私は「教育実践記録を書く」ことに示されるような力量だと言いたいのです。教育実践記録を書くことは、自らの実践を振り返ることであり、新しい意味の発見を生み、実践と研究の物語を紡ぎ出します。その作品は同僚や研究仲間と交流する際の「オリジナルテキスト」を作成することにもなります。ただし、MOBで言うところのオリジナルはもう少し深めなくてはなりません。自分だけのものだからというオリジナルにとどまらず、新たな意味を付け加えるという意味を考えたいのです。そのためには、先行実践や先行研究の検討が不可欠です。そのようにして、教育研究の蓄積を踏まえながら、現場研究者としての教師になって欲しいと思います。これらはまだまだ開拓的な課題です。それ故、この紀要が研究内容についても研究方法についても、教育研究の実践交流を通して開拓者の愉しみを共有する場になっていけばよいと願っているのです。